メテオライト

渡里あずま

illustration by きま餅

メテオライト

渡里あずま（表紙　きま餅）

遭逢

北の森に、ヘルハウンド――赤い目をした、黒い巨大な魔犬の群れが現れたと、冒険者ギルドに報告が上がった。

本来、単独で人を襲うことが多いので群れで動くのは珍しい。勿論、一般人には恐怖の対象だが、ギルドの実力者に与えられる称号である『帝』。その中でも最強と称される『全帝』が受ける依頼ではない。しかし個人的な事情だがこの後、依頼を控えることが決まっていたのでアルバは魔法で北の森へと一瞬で転移した。

七人の『帝』は皆、黒と見紛う深い紅のローブを纏ってフードで顔を隠している。

とは言え、魔犬の群れにはその知識はないので突然、現れたアルバを取り囲んで唸り声を上げた。けれど彼は動じず、ただボソリと呟いた。

「氷槍（アイスランス）」

刹那、数十本もの氷の槍が地面から出現し、ヘルハウンドの頭や腹を容赦なく貫く。物理的にだけではなく、火の属性であるヘルハウンドには水、あるいは氷属性の魔法が有効なのだ。

しばらく声を上げ、身を捩っていたが――やがて息絶え、動かなくなったのを見てアルバは来た時同様、転移で戻ろうとした。しかし、そこで不意にハッと顔を上げる。

「飛翔（ウイング）！」

そう唱えて地面を蹴ると、長身のアルバの体が一瞬で周囲の木々を跳び越えた。その動きでフードが脱げるが、周りには人はいないようなので気にしない。

そんな彼の目は近づいてくる落下物を、耳は絶叫を捉えている。

「神様の馬鹿ーっ！　落ちる落ちる落ちる落ちるっ……こう言う時こそ魔法？　魔法か……って、魔法ってどうやって使うんだよっ、馬鹿馬鹿馬鹿ーっ!!」

「……落ち着いて下さい」

声の主に、そう声をかけながら――アルバは、楽々と両手で受け止めた。それからふわり、とヘルハウンド達の亡骸を避けて地面へと降り立った。

（普通、人は空から落ちてはこない……もしかして、魔物？　いや、人の言葉を話すってことは魔族か？）

とは言え、髪と同じ黒い瞳を真ん丸くしてアルバを見ている間抜け面からは、とてもそうは思えない。

しかし一方で、平凡な外見に反してアルバが気づいたくらいその魔力は強大だ。このチグハグさは一体、何なんだろう？

「た、助かった……って、お姫様抱っこっ!?　すみませんっ、恩人に対して大変恐縮なんですが、降ろして頂けないでしょうか！」

「何ですって？」

「超絶イケメンに、こんなことさせたなんて……あなたのファンの女の子達に、精神的にも物理的にも俺、殺されますっ」

「……チッ。転移（テレポート）」

フードが脱げた今、受け止めて横抱きにしている相手にはアルバの顔が見えている。

白い、端整な面差しを縁取る肩までの金髪に、同色の長いまつ毛に縁取られた深緑の瞳。

見惚れられる事はあるが、涙目で必死に妙なことを訴えてくる少年に苛立ち――その気持ちのまま舌打ちしたアルバは、少年の言葉を無視して横抱きにしたまま、今度こそ転移でギルドの義母の元へと向かったのである。

判明

アルバの義母であり、ギルドマスターであるカリィは美しいだけではなく、明るく面倒見の良い女性だ。長い髪と同じ榛色の目を細め、ようやくアルバの横抱きから解放され、来客用のソファに座った少年に言う。

「行くところがないんなら、ここで暮らせばいいわよ」

そう、ここまではアルバも予想していた。実はアルバも昔、こんな感じで彼女に拾われたからだ。

しかし少年が今年、十六歳になると解ったことで話は変わった。変わってしまった。

「あら、そうなの？　てっきり、十三歳くらいかと……でも、それなら『魔法学園』に入るべきね」

「そんなっ!?」

思わず声を荒げたのは、少年ではなくアルバだった。

「だって、子供ならまず保護者が必要だけど……この年なら、将来も考えないと。これだけ魔力があるなら『魔法学園』に入ればギルドだけじゃなく、魔法使いになる道も選べるし。アルバも入学予定だから、一緒だと私も安心だしね」

「僕に、押し付けないで下さいっ」

「……えっ？　アルバ、さん？　俺と同じ年？　てっきり、年上かと……いや！　別に老けてるとかって訳じゃなくっ」

あっさりととんでもないことを言い出すカリィに、即座に言い返すアルバと。ずれたところに引っかかり、慌

てるあまり墓穴を掘る少年。
何故、こんなことになったのか――話は、少し前に遡る。

※

両手が塞がっているし、魔法を使うまでではないのでフードは脱げたままにしてある。
ただ、この帝のローブ姿で素顔を曝す訳にもいかないので、ギルドの受付ではなく義母の部屋の前へと転移した。そして、部屋の中に無断で入ることは出来なかったので謎の少年にノックをさせ、義母の――冒険者ギルドの長であるカリィの返事を待って、やはり少年にドアを開けさせて中へと入った。
「お帰り……で、アルバ？　どういうことなの？」
「空から落ちてきたので、とりあえず拾ってきました」
「っ!?」
突拍子も無いアルバの説明に、腕の中の少年がギョッとして顔を上げる。そんな黒髪の少年とアルバとをしばし見比べると、椅子に座っていたカリィは立ち上がって二人の元へと近づいてきた。
「……すごい魔力ね。アルバと、同じ……いえ、制御や訓練されてなさそうな感じでこれだから、まだまだ伸び代はあるかしら？」
常人はともかく、高レベルの冒険者や魔法使いなら他人の魔力を感じることが出来る。しかしギルド自体にもだが、カリィの部屋にも結界が施されているので、少年の駄々漏れ状態の魔力はまだ他の者には悟られていない筈だ。
（けれど、逆に言えば結界の中にでもいなければもっと早く、僕達はこれだけの駄々漏れの魔力には気づく筈な

のに……それこそ、幽閉でもされていたのか？）

そんな疑問を抱くアルバの前で、カリィがにこり、と少年に安心させるように笑いかける。

「私は、カリィ・ヴェーチェル。ギルドマスターよ……あなたは、誰？　どこから来たの？」

「……平遊星（たいらゆうせい）です」

「タイラー？」

「あ、タイラ、じゃなく遊星が名前です……この世界の言い方だと、遊星・平？」

「……この世界？」

妙な言い方をする、と引っかかり尋ねたアルバの腕の中で、少年――遊星は、は更に驚くことを言い出した。

「俺は、日本っていう国の……地球って世界から来ました。そこで死んだんですけど、あの、その原因が天使だった猫を車から助けたからで……だから、神様からこの異世界で転生するように言われたんです」

追想

この世界――ティエーラにはかつて、魔王が現れた。そして人間や亜人を支配し、魔族や魔物の糧にしようとした。そんな魔王を倒したのは、異世界から召喚された勇者だ。彼は元の世界には戻らず、魔王に攫われていた皇女を娶ってティエーラの繁栄を担ったという。ティエーラに住む者なら、赤ん坊以外は知っている話だ。

「ゆうしゃさまは、かえりたくなかったのかな……それとも、かえれなかったのかな？」

アルバも、母親から勇者の話を教わった。

十年前、体が弱かった彼の為に母は、ベッドの枕元で勇者の物語を読み聞かせた。

そして朝、畑を耕しに行く母親（父はすでに亡くなったと聞いている）を見送り、一人で部屋に横になりながらぽつり、と呟いた。

「ぼくたちが、まおうをたおせるくらいつよかったら、ゆうしゃさまをよばなくても……なんて」

そこまで言って、アルバは丸い頬に悲しげな笑みを浮かべた。

ティエーラに住む者は、ほぼ誰でも魔力を持って生まれてくる。心臓が、魔力の核でもあるからだ。

しかし、その魔力を放出させる（これを、人は魔法と言う）となると、誰でも出来る訳ではない。

やはり訓練が必要だし、年を取って体力が落ちたり子供でもアルバのように病弱だったりすると全く魔法が使えないのだ。これは体への負荷を防ぐ為の、自己防衛だと言われている。

「じぶんでできないのに、えらそうなこといっちゃダメだよね」

そう締め括り、少しでも元気になるようにと大きな緑の瞳を閉じたアルバだったが――不意に聞こえてきた悲鳴に、驚いて飛び起きることになる。
「アルバ！　あぁ、無事だったのね……っ」
「……おかあさん？」
「ごめんね、少しだけおとなしくしていてね……早く、逃げないと」
「えっ……？」
幾つも外から聞こえてくる悲鳴に、目は覚めたが状況が掴めずベッドから動くことが出来なかった。
そんなアルバの元へ、母が駆けつけてくれた。そして戸惑う息子に靴を履かせて自分のマントでくるむと、そのまま抱き上げて家を飛び出した。
刹那、アルバは声にならない悲鳴を上げた。
彼の住む村は小さな、けれど平和な村だった。それなのに今は、食人鬼（グール）達が村人へと襲いかかり食らいついている。
（どうして、どうして、どうして……どうしてっ!?）
この村に、魔法が使える者はいない。だから村人も、そして母もただ逃げることしか出来ない。
けれど、それも長くは続かず――スカートを掴まれ、強く引っ張られた母はそのまま転んでしまった。その勢いで、アルバも一緒に地面に転がる。痛かったがそれよりも、慌てて離れていく母へと手を伸ばした。
「おかあさん……おかあさんっ」
「アルバ、逃げ……っ！」
そんな彼の目の前で、グールが捕まえた母の首筋に噛み付いて引きちぎる。
「おか……あっ、ぁああ……っ!?」

瞬間、絶叫したアルバの頭の中が真っ白になる。
次いで炎の渦が、彼を中心にして巻き起こり――アルバに手を伸ばしていたグールを、そして村人達を貪っていたグール達へと放たれ、焼き尽くしたのである。

※

数日後。アルバが目覚めたのは生まれ育った村ではなく、アスファル帝国の都であるリーラであり、そこにある冒険者ギルドだった。
「気がついたのね？　大丈夫？　気分は？」
「ここ、は」
「リーラよ。私は、冒険者のカリィ……あなた、熱を出してずっと寝込んでいたのよ？」
「……たすけて、くれたの？」
気遣うように覗き込んでくる榛色の瞳は、色こそ違うがアルバに母親を思い出させた。そこで母や、村人達がグールに襲われたことを思い出し――目の前の美女が、自分を助けてくれたのかと思って尋ねた。
しかし、カリィは首を横に振った。
それから、戸惑うアルバに視線を合わせるようにベッドの横の椅子に腰掛けた。
「食人鬼を倒したのは、あなたよ。あなたが、炎の魔法で」
「うそ……」
「えっ？」
「だって、ぼく、まほうはつかえなくて……なんで⁉　まほうがつかえるなら、ぼくはおかあさんをたすけられ

た！　みんなを、たすけられたのに……なんでっ!?」
　母の死がきっかけになり、身の危険も顧みずに魔法を使ったのだと今なら解る。けれどその時は訳が解らず、抱き締めてくれたカリィの腕の中で泣き叫んだ。
　そんなアルバの頭や背中を、カリィはずっと、優しく撫でてくれた。そしてようやく泣き疲れ、叫ぶのをやめた彼に言ったのだ。
「過去は変えられないけれど、未来は変えられるわ……あなた、私の子になりなさい。そして魔法を覚えて、強くなるの。魔物から、皆を守れるように」
「う……は、い」
　カリィの言葉は、途方に暮れたアルバを照らす光のようだった。
　それ故、カリィに頷き答えようとして――少しでも大人にならなくてはと、アルバは言葉遣いを改めて返事をした。
　騎士や魔法使いは国を、そして冒険者ギルドは魔物から民を守ると言われている。
　そしてアルバは、実は風帝だったカリィの養子となり、心身共に鍛えて異例の全属性の魔法を使える『全帝』となったのである。

逆鱗

魔力の属性は大抵一つ、二つ以上あるとそれだけで珍しいと言われる。
かつての勇者は、全属性の魔法が使えたと伝わっており――それ故、同様に全属性の魔法を使えるアルバを、勇者の再来と呼ぶ者もいる。

「もしや、と思ったけど……ユーセイも、全属性なのね」

召還された訳ではないが、遊星も伝説の勇者と同じ異世界人だ。
そんな訳で、カリィは属性を調べられる水晶を遊星に持たせた。すると、それぞれの属性を示す色が水晶の中で幾つも煌いた――カリィに拾われたばかりの、アルバのように。
（属性を調べるのは本来、六歳になってからだしな）
知っていれば村を、両親を助けられただろうか――そう思ってしまうこともあるが、過去は誰にも変えられない。それに属性があっても放出させ、魔法として使いこなすのは別の話だ。アルバはこのギルドで、義母に魔法を教わったので『全帝』と呼ばれるまでになったのだが。
「はぁ……神様が、生まれ変わってもまたすぐ死なれたら困るって」
「……随分と、恵まれているんですね」
「アルバ」
遊星の言葉に引っかかり、つい嫌味のような言い方をしてしまったアルバをカリィがたしなめる。

けれど善行ゆえの加護なのかもしれないが、簡単に手に入れたと聞くと、やはり不愉快だ。異世界から来たのに、言葉が通じるのも同様の理由なのだろう。しかもそれを口に出す辺り、馬鹿だと思う。

物語の勇者に対しては感じなかったが、実際、こうして目の当たりにすると苛立ちしか感じない。本人に悪気はないんだろうが、今までの自分の努力は何だったのかと思ってしまうからだ。

「ただ、いくら恵まれていても使いこなせないと意味がない。実際、僕が助けなければ地面に激突してあなた、死んでましたよね？」

「……はい」

「アルバ。『魔法学園』に行けば、魔法を勉強出来るでしょう？」

「マスターが決めたなら、そうすればいい。ただこれ以上、僕を巻き込むのはやめて下さい」

これ以上、と言ったのは今回の『魔法学園』入学もまた、カリィから命じられたことだからである。

今年十六歳になるアルバだが、すでに『全帝』になっている。けれど、義母から「大人ばかりではなく、同年代の者と接することも必要だ」と言われて渋々了承したのだ。その上、魔力だけはあるが世間知らずの異世界人の面倒を見るなんて冗談じゃない。

「依頼を完了したと、受付に伝えて来ます」

そう言うとアルバはフードを被り、カリィの返事を待たずにカリィの部屋を後にした。

『魔法学園』は、その名の通り魔法を学ぶ学校だ。とは言え、誰でも入れる訳ではない。試験を受け、一定以上の実力がなければそもそも受からないのだ。

（あの調子だと、入学自体も怪しいな）

入学までは十日ほどある。

元風帝・現ギルドマスターのカリィの伝手で入学試験は受けられるとしても、合格するかどうかまで便宜は図

れない。

……そんなアルバの予想は、けれどあっさり覆されてしまった。

試験の為に、カリィが魔法の基本的なことは教えたらしいが――遊星はあっさりと全属性の魔法を、しかも無詠唱で使いこなせるようになり、アルバと同様に満点で合格したのである。

メテオライト

発行日　2022 年 5 月 30 日

著者　渡里あずま（表紙　きま餅）
https://www.pixiv.net/member.php?id=45432486
連絡先　contact@rainbow.sakura.ne.jp
印刷　シメケンプリント

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。